

逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



笠ヶ岳の思い出

今年もまもなく夏山シーズンになる。若き日の山々を回想しながら、このところ年に2〜3回は北アルプスに登っている私ではあるが、昨年は天安門事件前後から多忙をきわめ、7月初旬から『中国の悲劇』の書き下ろし、8月中旬からは「東西ヨーロッパを比較する」と銘打った私のゼミの海外研修旅行にてかけたため、ついに山に登ることができなかった。

最近、書庫の隅から古いスケッチ・ブックが何冊か出てきて、忘れかけていた山の絵がかなり見つかった。この絵は浪人中の新緑の頃に西穂高岳の頂上から笠ヶ岳を描いたものである。北アルプスの主山脈から離れていることもあって、あまり人の入らない笠ヶ岳は、その山容が重厚かつ壮大で楡や穂高とは異なった趣きがある。

様々な角度から笠ヶ岳を見ているけれど、登ったのは一度だけで、飛騨側から北アで一、二を競うきつい直登ルートを重ねた重いテントを荷負ってつめたことが。ついに途中でバテてしまって一夜ビバークしたけれど、忘れ得ない登山であった。山頂の山小屋のランプが幻想的で、夕暮れの小屋の窓からランゲ作曲の「アルプスの山小屋にて」のメロディーをいつしか私は口ずさんでいた。もう35年も前のことである。

(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

東亞

1990

7

No. 277

中国海軍の「近海防衛」戦略と
航空母艦の建造計画

平松茂雄

中国現代史の証言

「胡風事件のいきさつ」は真実ではない

梅 志
訳・吉田富夫

講演記録

北京特派員の見た中国

斧 泰彦



KAZANKAI